

共同研究 半七捕物帳 (四)

序

「雪達磨」小考

浜田雄介

「柳原堤の女」小考

市地 英

「三つの声」小考

本田逸朗

「ズウフラ怪談」小考

栗田 卓

「大阪屋花鳥」小考

河津澄江

「大森の鶏」小考

高橋昭男
小山恭平

序

浜田雄介

本誌第十九号より開始した共同研究の第四回である。母体となっているのは大学院における近代文学の演習であり、出発点となった問題意識は第一回の序に記した通りである。

テキストは現在の流布本である光文社文庫版『半七捕物帳』を用いているが、第一巻から読み進め、その年に論考にまとめればその年に、そうでなければ翌年にとりう具合にゆるやかに進めて今年度は第四巻にいたった。この巻は、岡本綺堂が半七捕物帳を中断していた昭和初年代を挟んで、その前後に発表された作品を多く含む。研究会ではいきおいその中断の前後の変質や、またあらためて大正七年の第一作以来の変貌に視線が向けられることも多かった。慎重に考えるべき変質は確実に存在するが、研究会で論じられたこと多くは、必ずしも論考化はなされなかった。問題の性質として、この小考の積み重ねという形式とは異なるアプローチが、あるいは要請されるのかもしれない。

今回集まった論考を一覧する。市地論文は「雪達磨」において半七の推理と謎の解明とが微妙にずれながら進むドラマツルギーを確認し、雪達磨が象徴するものを読み解く。本田論文は怪異が噂を媒介に相乗的に怪異を生む柳原堤という場所を分析し、そのような

場所が悲劇の舞台となることの悲劇性を見る。栗田論文は三つの声を聞く聴覚と事実を目撃する視覚との優劣が取り調べにおいて反転するさまを分析し、岡つ引きの持つ奇妙な現代性を暴く。なお栗田氏は学外からの参加で、科学研究費補助金(特別研究員奨励費24・1009)の交付を受けている。河津論文は知的障碍者をめぐるドラマツルギーに、不安定な時代の中でズウフラという新技術に翻弄される民衆の姿を読む。高橋論文は史実や実録を確認し、登場はわずかながら物語を統括し作品タイトルにもなる大阪屋花鳥のリアリティのありようを示す。小山論文は大森という場所から事件の背後にほの見える新田義興の物語の枠組みを指摘し、そこに組み込まれた鶏の意味をさぐる。毎回思うことだが、論文が一つの達成ではあるにせよ、発表やディスカッションのもつとも興味深かったところの多くがなぜか消え去ってしまうのが少し悲しい。

各論考本文については基本的に執筆者に委ねているが、梗概を示し、適宜書誌や異同を示すスタイルはある程度の統一を図っている。原則として本文の引用は岡本綺堂『半七捕物帳』(三)新装版(光文社、平成一三年一月)、『半七捕物帳』(四)新装版(光文社、平成一三年二月)を用いた。また各論考はそれぞれ扱った作品の謎解きや結末に触れている。

事件の捜査が進むにつれ、意外な内幕が明らかになる展開は半七捕物帳シリーズにおいてさほど珍しい趣向ではない。「雪達磨」は、予想外の犯罪が明らかになるだけでなく、殺人事件かと推測された一件が殺人事件ではなかったという顛末であり、言ってみれば「拍子抜け」の結末が待つ物語といえる。こうした意外性は、探偵物語である「雪達磨」にどのような作用を持たせ、どのような要素によって成り立っているのか、考察していきたい。

「雪達磨」の初出誌は不明、初刊は大正十二年七月発行新作物版『半七捕物帳第二輯』であり、関東大震災以前に発表された作品であるのは確かである。今内孜は大正七年〜大正十二年の作品ではないかとしている。冒頭では大正十一年四月発行新作物版『半七捕物帳第一輯』のはしがきと同様の、「探偵物語に江戸のおもかげを取り入れる」という半七捕物帳の基本的な方針が述べられている。初刊収録時からその冒頭は存在しており、半七捕物帳のシリーズについて読者に向けた綺堂の姿勢が表れた作品でもある。この読者への断り書きには異同があるが、詳しくは後述したい。

物語は一章から四章までの構成になっている。梗概は次の通り。文久二年の正月は三が日まで大雪が降り通し、八百八町を埋め尽くした。江戸の人々は諸方に雪達磨をこしらえた。正月十七日、一ツ

橋門外の二番御火除け地の隅、曲木家の御用屋敷の日かげにあった六、七尺の大きな雪達磨が崩れ、中から男の変死体が出てくる。雪達磨の中に押し込められていたからにはその死に事情があると考えられたが、服装で江戸の者ではないと分かっていたものの、役人の調査、町内の者の詮議にも関わらず死体の身元・死因共に不明だった。そこへ半七が現れ、身元不明の死体を検め、雪達磨があった場所に南京玉を発見する。半七は暖簾の古い店を選ば田舎者の癖から見当をつけて、日本橋馬喰町にある小間物屋菊一に向かい、南京玉を買った人間を割り出した。その結果、死体の人物が宿屋信濃屋に宿泊していた上州太田の百姓甚右衛門だと突き止める。それでもどうして殺されたか分からないので、度々甚右衛門が買物をしていたことを宿屋の番頭から聞き出して部屋を検めると、不自然な量の南京玉が押入れから出て来た。半七は南京玉で贋金を造る手口があると思い出し、更に番頭から聞き込みをして鋳職人の豊吉が甚右衛門を訪ねてきたとの情報を得る。品川から女郎を請け出して共に暮らし堅くなったと言われていた豊吉だが、半七が訪問して南京玉を見せると逃げ出そうとする。半七は番屋へ豊吉を引つ張って詮議したものの、なかなか口を割らない。豊吉と共に暮らしていたお政から普段から出入りしている者を聞き出し、職人の源次と勝五郎、四谷の酒屋播磨屋伝兵衛、青山の下駄屋石坂屋由兵衛、神田の鉄物屋黒右衛門、麻布の米屋千倉屋長十郎の六人を召し捕り、彼等が共謀の贋金遣いであったと明らかにした。甚右衛門はその仲間で、田舎者に

化けて旅中巧みに贖金を遣っていた者だった。甚右衛門の死には鎊

職人の豊吉と源次、近江屋九郎右衛門と石坂屋由兵衛が関わっていたが、豊吉がお政の請け出しのため金を借りて甚右衛門と近江屋に頼みに行ったところ、酒の席で突然死んでしまったのであった。後に残された四人は後ろ暗い思いから甚右衛門の死体を運びだし、秘密裏に処理しようとした。その際、発見が遅れるよう雪達磨の中に押し込んだのが仇となり、僅かな南京玉を手掛かりに贖金遣いが露見してしまつたのだつた。贖金遣いは皆法の通り磔刑となつた。

読者の目線

「雪達磨」の冒頭は、次のような読者に対する断り書きから始まる。

改めて云うまでもないが、ここに紹介している幾種の探偵ものごとに、何等かの特色があるとすれば、それは普通の探偵的興味以外に、これらの物語の背景をなしている江戸のおもかげの幾分をうかがい得られるという点にあらねばならない。わたしも注意して、半七老人の談話筆記をなるべく書き誤らないように努めているつもりであるが、その説明がやはり不十分のために、往々にして読者の惑いを惹き起こす場合がないとは限らない。

これらの物語について、こういう不審をい多く人のあることを屢々聴いた。

(各傍線は稿者による)

「改めて云うまでもないが」の箇所は、初刊では「第一輯のはしぎに書いた通り」、春陽堂版では「上巻のはしぎに書いた通り」と、それぞれの版の刊本のはしぎに対応させ、変更している。断り書きがその刊本の読者に対するものになるよう配慮しているのである。また、「これらの物語について」の箇所は、初刊で「第一輯の物語について」となっており、昭和四年一月刊春陽堂版以降「これらの物語について」に変更され、その後統一されている。

半七捕物帳シリーズは、半七老人の語りを聞き手の「わたし」が談話筆記する形式である。刊本のはしぎと対応させた配慮と、物語と地続きになつている冒頭の「わたし」による読者を取り込んだ断り書きには、物語の橋渡しをする「わたし」を中継点に、小説の枠を越えさせて半七老人や江戸の半七の動向になるべく読者を引き寄せる狙いがあったと考えられる。

読者を作品に引き寄せる作用は、半七の活躍が描かれる過程に表れている。章の終るごとに何かに気付き、次の章でその気付きの内容が明らかになる趣向によつて、半七の推理が効果的に明かされるのである。

一章の終わりに半七が登場し、他の役人が見つかることのできなかった手がかりを見つめる。手がかりの正体は二章で明かされ、南京玉であつたことが分かる。二章では、大量の南京玉が発見されて、

あつと気付くところで章が終わる。そして三章で豊吉を捕まえて吟味をしているところで、初めて読者は贓金遣いが事件に関わっているという半七の推理を知ることができる。この間、読者が物語の推理に参加することはできない。物語内で常に半七は先行して、経験と知識に裏打ちされた推理をし、章が変わるごとにいきなり行動に移っている。「雪達磨」でいう探偵物語は、読者が推理に参加しながら読み進めることのできる推理小説とは異なり、探偵が捜査を展開して活躍する姿を読者が見物する探偵物語なのである。

そんな半七の活躍を見物する目線に対し、ひとつの仕掛けがなされている。「雪達磨」は必ずしも半七やその他の人々の推理と一致する展開ではないのである。

最大の不一致は、雪達磨の中から変死体が現れたときの人々の考えである。

これほどの大きい雪達磨をわざわざこしらえて、そのなかに死骸を忍ばせておく以上、それには何かの仔細がなければならぬ。彼の死因には何かの秘密がまつわっている。【一章】

最初に死体を検分した役人たちの見立てで事件性が疑われるのであるが、それは死体の死因にまつわるものである。半七が捜査をしていく過程でも、

かれが何者に連れ出されて、どうして殺されたかということはいくつも想像が付かなかつた。

それにしても甚右衛門を誰が殺したのか、それはまだ判らなかつた。

かれら一同はどうで助からない命であるから、誰が甚右衛門を殺そうとも所詮は同じ罪であるものの、

とあつて、ずっと殺人・死体隠蔽事件のつもりで捜査している。

ところが、四章で甚右衛門の死因は、贓金遣いたちの証言によって病死か何かと考えられるものと分かり、事件性がなかつたと発覚する。半七はもとより、物語の中で半七が捜査をしていく様を見物している読者にとつても、「雪達磨」は殺人の捜査を行っていると思つているのに、終わりには予想外の真実と直面する仕掛けになっている。

読者の目線を引きつけた末に明かされる事件性のなかつた変死体が、予想外の要素のひとつである。

談話筆記

次に「雪達磨」の談話筆記の特徴について考えてみたい。

前述したとおり半七捕物帳シリーズは、明治を生きる「わたし」が半七老人から江戸の話を書く形式をとっている。その多くは半七老人が話を始める場面(明治) ↓ 岡っ引き半七が活躍する事件の顛末(江戸) ↓ 事件解決について半七老人が解説(明治) という構成になっている。事件解決場面は、事件の全てが思い出となっている半七老人が解説し、「わたし」とやりとりしていくことで浮き彫りになっていく場合が多い。

こうした構成であるため、大概の半七捕物帳シリーズでは半七老人の登場が欠かせない要素であるが、「雪達磨」で半七老人の発言が登場するのは、一章の「わたし」の読者に対する断り書きの最後に

「これはわたくしの縄張り内ですから、威張って話せませんよ」と、半七老人が笑いながら話し出したのは、左の昔の話である。

と述べる一文のみである。

「雪達磨」四章の事件解決場面では、舞台を江戸のまま、犯人たちが雪達磨に死体を埋めてしまう動向が描かれ、磔刑になった犯人たちの末路まで補足されている。つまり、「わたし」は四章で半七老人の談話を再現するより、犯人たち視点の物語に重きを置いて再編しているのである。

犯人たちが重視されていると看取される点は、半七の推理・捜査が功を奏しながらも、実情とズレが生じる場面にもいえる。

二章で甚右衛門の身元が明らかになるとき、半七の推理が披露される。甚右衛門の身元が分かった根拠として、「田舎の人は詰まらぬものを買うにも、とかく暖簾の古い店をえらむ癖」があるから、「馬喰町の近所で最も名高い小間物屋」に行った、としているが、後になって実は甚右衛門が怪しまれないように、あちらこちらの店で南京玉を少しずつ購入していた経緯が分かる。南京玉を証拠品として発見した以上、いずれ甚右衛門が買物をした小間物屋は明らかになっただろうと考えられるが、半七の「田舎の人は詰まらないものを買うにも、とかく暖簾の古い店をえらむ癖」という推理で、すぐに該当する小間物屋を見つけたこと自体には、事件解決において特段の必然性がなかったのである。

談話筆記は経験者の語る実話を物語とした形式である。半七老人は自らの経験を脚色して語れたはずであるが、半七の推理が完璧に事実と一致していたことにはしていない。多くの人が生きる江戸を舞台として起こった出来事は半七が推理できる範疇に収まり切らない。そのため推理と事実がはつきりと一致するのではなく、ズレが生じる。江戸で起きた事件の捜査をした物語上の実験の経験者、半七の「予想外」がここでは描かれている。

「雪達磨」における談話筆記の形式は、構成の面で犯人たちのエピソードを強調する。また、実際に江戸を生きた人間の経験譚として、主人公(やその他の登場人物)の推理がすんなり説明と結びついていくわけではないという「予想外」を引き起こしている。

犯人と半七の推理

読者の目線を引き寄せる作用と、談話筆記の形式は、両方とも四章の解決場面に、「予想外」の落差を作り出す。これらは、最初の雪達磨の謎に、犯人がどのような物語を持っていたのが、重要な鍵になると示唆している。

作中で人物像が詳しく描かれる人物は二人いる。一人は甚右衛門であり、もう一人は銚職人の豊吉である。

甚右衛門は半七の捜査対象だったために素性が明らかになつていく。半七は信濃屋の番頭に甚右衛門の生活について聞き込みをし、「田舎の人にしては朝寝」という違和感を覚え、この違和感をきっかけに甚右衛門と贋金遣いを結びつける。

事件解決の大きな鍵となる銚職の豊吉は、小博奕をやつていたよな評判の悪い男だったが、文久元年の春頃から堅くなり、本来の銚職人の仕事に精を出すようになって、女郎のお政を請け出した。大きな金の動きがあつた証拠である情報を得て、半七は豊吉が贋金遣いの一味の一人だと見当をつける。

南京玉を証拠に捜査をしてきた半七だが、贋金遣いという犯罪を明らかにするために重要だったのは、聞き込みによって捜査対象人物の生活ごと洗い出し、犯罪が絡んでいるとみられる気配や動きを見つけ出すことであつた。こうして明るみになるのが、犯人たちのエピソードである。豊吉はお政をすっかり請け出したがために十

五両を工面しようとして年末年始に甚右衛門に無心に行つた。この些細な働きかけが犯罪の痕跡として半七の目に留まるのである。

半七の訪れに逃げようとし、吟味には往生際悪く言い逃れようとし、遂には黙秘する豊吉の姿からは、何としてでも罪に問われぬようにする姿勢が見て取れる。犯人たちの心内の描写がほとんど描かれない「雪達磨」だが、半七が人々の生活の一部を聞き出し、堅気になつたエピソードや金を無心に行つた動機が簡潔に挿入されていることで、犯人の心の動きが読み取れるようになっていく。

雪達磨

では、殺人事件とは無関係であるのに関わらず、中心的な謎となつている雪達磨に、物語の上でどのような役割が込められているのだろうか。

江戸時代の雪達磨は浮世絵『江戸名所道戯尽 廿一 御蔵前の雪』のように雪を積んで達磨の形にしたものであつた。「雪達磨」には

のん気な江戸の人達は、たとい回礼に出るのを怠つても、雪達磨をこしらえることを忘れなかつた。諸方の辻々には思い思いの意匠を凝らした雪達磨が、申し合わせたように炭団の大きい眼をむいて座禅をくんでいた。

と描写され、大雪が降つた後であるにも関わらず、江戸の人々が何

ともなしに作る遊興として、雪達磨は登場する。雪達磨には興を求め、人々の心が表わされているのである。

そんな雪景色に甚右衛門の死体が押し込まれた雪達磨が混ざっているのだが、甚右衛門が突然死して、雪達磨に押し込まれる経緯が明かされる四章で、贖金遣いの一味の慌てた行動だったと分かる。甚右衛門の死に、仲間の近江屋に集まっていた一味の四人には責任がなく、後ろ暗いところもないはずだが、四人は甚右衛門の死体の隠蔽にかかる。この行動は、結局は悪事をして堂々としていられない、素人くさい自信のなさから発露している。

何分にもうしろ暗いことがあるので、甚右衛門の死をなるべく秘密に付してしまいたいと思つた。

主人の九郎右衛門もなんだか不安なので、これもそこらまで送つてゆく振りをして後から出て云つた。

堀端の火除け地に捨てようとしたが、なるべく一日でも後れて人の眼につくことを考えて、かれらは協力してそこに大きな雪達磨をつくつた。

(各傍線は稿者による)

「何分にもうしろ暗い」「なるべくは秘密」「なんだか不安」「なるべく

く一日でも後れて」といつたはつきりしない言葉で、「バレたくない」という心の不安のままに行動した雰囲気を描かれている。死体を完全に隠蔽する知恵もなく、行き倒れを装って死体を道に放つておく度胸もなく、贖金遣いの仲間たちは死体発見を引き延ばす目先の行動にとらわれる。

甚右衛門は南京玉を買い集めて準備をしたり、豊吉が金を無心に來ていたことからすると、やはり贖金遣りの発起人だと考えられる。確固たる犯罪の発起人である甚右衛門がいなくなったその時、市井で暮らし犯罪に片足を突っ込んでいる仲間たちは「何分に」「なんだか」「なるべく」といった不明瞭な感覚で行動するしかできなくなるのである。

雪景色の江戸の町に作られる雪達磨が江戸の人々の遊興の心の表れだとしたら、甚右衛門を埋め込んでいた雪達磨は、犯罪の後ろめたさや、贖金遣いの仲間たちが意識しない内に頼つていた甚右衛門が死んだ、不安や焦りが形になったものだったといえるだろう。

読者の視線を「殺人事件の捜査」に引きつけながら、変死体に事件性がなかったと発覚する「予想外」と、主人公の推理を越えて人々の思惑が動いていた「予想外」。二つの「予想外」が結びついてくるのは、談話筆記の再編で強調された犯人たちの物語であり、これによつて第三の「予想外」に導かれる。すなわち、雪達磨に堂々と死体を隠したと思われた殺人犯は、半七や、捜査についてきていた読者の思い描いていた殺人犯とは明らかに異なり、後ろめたいばかり

の気持ちに追われ、浅慮のために不安や焦りといった形にする必要のないものまで残してしまうくらい迂闊な「拍子抜け」の犯人たちなのである。

雪達磨は形があつても、いずれは崩れ去るものとして描写されている。

こうして、惨めな、みにくい姿を晒しながら、黒い眼玉ばかりを形に残して、かれらの白いかげは大江戸の巷から一つ一つ消えて行つた。

その消えゆく運命を荷っている雪達磨のうちでも、日かげに陣取っていたものは比較的長い寿命を保つことができた。

くずれた雪はその証跡を湮滅せんとするかのようにな次第々々に消え失せて、いたずらに泥水となつて流れ去つた。

半七や読者の殺人事件という見解も、贖金遣いたちの物語によつて、消えていってしまう。雪達磨は、江戸の人々の遊興の心、焦りや不安といった贖金遣いたちの心、半七や読者の心積もりといった、形があつてなきようなものの表れなのである。

以上のように、「雪達磨」には、読者を引き寄せ、物語中の登場人物の推理を反故にし、殺人事件を消失させる、そんな作用を持たせ

ながら犯人たちの物語へ焦点化する動きがみられる。これらは、半七という探偵が、証拠品以上に、江戸を生きる人々の生活ごと洗い出し、その中から犯罪の動きを察知する嗅覚を発揮する捜査方法と連関している。形のない心の表れから、確実な事実へと導きだしていく。「雪達磨」には、読者の目線とは裏腹に、人の心の動きがつくつた謎と、犯罪が残した謎が並行して解明されていく過程が描かれているのである。

注

- (1) 今内孜『半七捕物帳事典』(国書刊行会、平成二十二年一月)
- (2) 岡本綺堂『半七捕物帳 第二輯』(新作家、大正十二年七月)
- (3) 岡本綺堂『半七捕物帳 下』(春陽堂、昭和四年一月)。「改めて云ふ迄もないが」という冒頭は、『半七捕物帳 第二集 春の雪解』(同光社磯部書房、昭和二十七年)からである。
- (4) ただし、昭和七年三月刊の改造社『岡本綺堂全集 第一巻』では「上巻のはしがきに書いた通り」となっていて、綺堂の手が入っていない。昭和二十一年十一月刊オールロマンス叢書『半七捕物帳 第三輯』であると「上巻のはしがきに書いた通り」、昭和二十三年三月刊同光社『半七捕物帳 巻四』においては「はしがきに書いた通り」、昭和二十五年二月刊同光社『定本半七捕物帳 二』は「はしがきに書いた通り」となっている。昭和

「柳原堤の女」小考

本田 逸 朗

二十七年以降であっても昭和三十一年刊早川書房『定本半七捕物帳 第二巻』は「はしがきに書いた通り」としている。綺堂の死後はいずれかの版の冒頭を踏襲している。

(5) 「雪達磨」で談話筆記だと断っているほか、シリーズ第一作「お文の魂」の末尾に、「その茶話のあいだに、わたしは彼の昔語りをいろいろ聴いた。一冊の手帳は殆ど彼の探偵物語でうずめられてしまった。その中から私が最も興味を感じたものをだんだんに拾い出して行こうと思う」とある。

(6) 半七捕物帳シリーズ六十八作中五十八作がラストの事件解説で半七老人と「わたし」が会話する明治時代に戻る形式になっている。

(7) 広景画『江戸名所道戯尽 廿二 御藏前の雪』（辻岡屋）国立国会図書館デジタル化資料 (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1308282> 平成二十五年九月十七日参照)

参考文献

- 今内孜『半七捕物帳事典』国書刊行会、平成二十二年一月
岡本綺堂『半七捕物帳 第一輯』新作社、大正十二年四月
岡本綺堂『半七捕物帳 第二輯』新作社、大正十二年七月
縄田一男『半七捕物帳』考』『専修国文』第三十九号、昭和六十一年九月

一、梗概

慶応元年の八月初め、神田柳原堤の清水山に一人の怪しい女が現れるという噂が立った。奇怪な言い伝えのある場所ゆえに女子供を怖がらせ、夜鷹や中間が脅かされた事によって、噂は尾鰭が付いて広まっていった。そこで、材木屋山卯の雇い人の喜平と木挽職人の銀蔵が清水山へ探検に行き怪しい影を尾行すると、二人は突然に殴り倒された。翌日、喜平が仕事場で前夜の事を語り、大工の勝次郎を探検に誘っていると、突然材木が倒れてくる。皆空恐ろしくなり、勝次郎もその晩探検に現れなかった。憤慨した喜平は建具屋の職人茂八に声を掛け、清水山に踏み込んだ。すると急に正体不明の獣が現れ、逃げ出さざるを得なくなった。喜平が攻めあぐねていると、最初の晩には喜平と銀蔵が大入道に投げ飛ばされ、後には九尾の狐に喰われかかったとの噂が出てきた。この噂が盛んになり、遂に町奉行所も動き、半七にも声が掛かった。半七は手下と共に捜査に乗り出すと、髪結床の亭主の甚五郎に話を聞き、中間達の犬が清水山で怪しい箱を見付けた事、変な男が時々髪を束ねに来る事を知る。又、山卯へ赴いては小僧の利助を問い詰めて、材木が倒れてきた一件は勝次郎の仕組んだ自作自演であった事を明らかにする。勝次郎

を呼び立てて尋問すると、彼は噂の怪しい女と知り合った一応の事情と顛末を述べた。半七は勝次郎を帰すが、手下に勝次郎の仕事先を洗わせる。翌朝、喜平から勝次郎が昨晩から帰らない事を聞くと、勝次郎の親方らに聞き込みを行い、手下からの報告も合わせて考えを述べる。以前に勝次郎が仕事に行った雜司ヶ谷の庄司の一家は癩病か何かの血筋を引いている。勝次郎に会いに来る女はその末娘のお早で、もう病気の発しているのを絵具で隠し、暗く人の居ない清水山で会っているのだ。喜平と銀蔵を殴った者、髪結床の怪しい男、勝次郎を攫っていった者は庄司の家の奉公人であろう、と半七は鑑定する。次の日、庄司の家へ出向いて行って、主人の藤左衛門に会うと、離れて勝次郎とお早の死体を見る事になった。勝次郎は仕事に来た折にお早と知り合ったが、仕事が終わって勝次郎が通って来なくなった後はお早の方から会いに来た。喜平が清水山の探索に現れてからは通いを止めさせられたが、お早が狂乱の体を見せたので遂に勝次郎を攫ってくる事になった。二人を離れに置いておいた所、お早が無理心中を仕掛けたと見られた。結局、二人は只の心中として同じ墓に葬る事に落ち着いた。その後、喜平と茂八が再び清水山の探索を行い、一匹の獣を生け捕った。四尺余りで黄色い毛と長い尾を持ち、馳によく似ていた。おそらく貂であろうと考えられたが、結局一種の怪獣と見なされて見世物小屋に晒されてしまった。又、中間達の犬が清水山で見付け出した怪しい箱もお早の仕業と思われるが、詳細は不明なままであった。

初出は大正一四年一月五日から二月十五日にかけて発行された『旬刊写真報知』第三巻一号から五号。初刊は新出版社版『半七捕物帳』第五輯。本文の引用及びテキストは光文社文庫『半七捕物帳（四）新装版』を用いた。

二、怪異の典拠

本作に見える怪異の内、清水山の伝説と犬が啞えだしてきた箱については、その典拠かとも見られる記述が諸文献の中に見られるので掲げる。

・清水山とその伝説について

本作冒頭、半七老人は一連の事件の中心となった清水山の謂われについて語る。これについて、神田公論社から大正二年に発行された、清水晴風『神田の伝説』に次のような記述がある。

この柳原堤の一部で筋違御門と柳森神社との間に、清水山といふ小丘があつた。この丘の神田川に面した所に洞穴があつて、其處から清水が湧き出て居たと傳えられて居る。古老の話によると、柳原堤の清水山は古來怪異なことが多く、此所に近づけば必ず危難の處があるといふので近寄るものがなかつた。そこで僅かの處にも拘はらず、足跡を絶つて雑草が生ひ茂つて居た。其の雑草は飼馬の料として、大名や幕士には尤も必要なものであつて、筋違御門から和泉橋までの雑草は、市橋壹岐守と富田

帯刀の兩家で刈取^{かりと}つて居たのであるが、清水山ばかりは妖怪の祟^{たた}りをなすといふ説を信じて、雑草の刈立ても丘の二三間の地は堤の上下を通じて、一筋刈り残したさうである。夫れで醜草^{しこう}は彌^やが上に繁茂^{はなも}もして、仰ぎ見るさへ物凄^{ものぞろ}く全く妖怪^{やうかい}の潜^{ひそ}んで居るやうに思はれた。また其の上に清水山に就ては、三人心中心とされ居た。³

半七老人の語り口と非常に似通つた記述である。『神田の伝説』が何を元にして執筆されたかは不分明であるが、この話が巷間に流布していた話だとすると、綺堂が『神田の伝説』を直接参照したとまでは言わずとも、この話を聞き知っていて参考にしたとは十分考えられる。

又、右引用文中にある「三人心中」とは一体どの様な事件であったのかは不明だが、或いはこの心中という事はお早と勝次郎の無理心中という、話の筋の参考に使われたのかも知れない。

・犬が唾えだしてきた箱について

物語中盤、旗本の間違の犬が清水山から白木の箱を唾えだしてくる。この事について、よく似た記事が、大田南畝『平日閑話』巻十に記載されている。

○神田藍染川の怪犬 同年（文化七年・稿者注）四月廿三日の朝、神田藍染川に犬有りて一つの箱を喰ひ破れり。中に藁人形有。蛇をまとひ、蛇の頭より大なる針を打付たり。あやしければ、公聴に訴しとなん。〔割注〕室町雪の屋にて其夜所聞なり。³

作中ではこれに加えて、人形の腹にヤモリが釘付けにされていたが、犬が箱を唾えていた事、箱の中に藁人形が入っていて蛇を巻き付けて打ち付けてあつた事は共通である。

『武江年表』等から話の素材を拾う事の多かつた綺堂の創作姿勢が、ここにおいても現れている。これらの事、とりわけ清水山について一連の事件の主たる舞台となり、作品の中で上手く利用されている。当時、人々の間で、清水山に対する共通認識があつたならば、場所の特異性というものを強調するのに更に効果があつただろう。

三、謎の獣と白木の箱について

本作の主とするところはお早と勝次郎に関する一連の事件である。しかし、清水山に纏わる様々な出来事の中でも、謎の獣と白木の箱の事に付いてはこの主とする所に絡んでこない。この二つの要素はどのような役割を果たしているのか。

まず、清水山に現れた謎の獣であるが、この獣は最終的には生け捕りにされている。噂のような九尾の狐ではなく、実体のある動物であることが確認されるのだが、それでも只の獣となっていない所

に注目したい。

四尺あまりの獣がその畏にかかった。獣は馳によく似たもので、黄いろい毛と長い尾を持っていた。おそらくは貂であろうと判断されたが、それほど大きい貂は滅多にあるものではないというので、所詮は得たいのわからない一種の怪獣と見なされてしまった。そうして、清水山に怪異があるというのは、こんな怪獣が棲んでいる為であろうということになった。

妖怪ではなくても、怪獣という見られ方をされて、清水山の怪異の原因と見なさせられている。この獣は出自も不明であり、体長四尺というのも一般的な貂の約二倍の大きさである。しかし、珍しいと言えるだろうがやはり獣であり、妖怪ではない。それが衆目に晒されてもただの獣とはされず、なお怪異性を失わないのは、魔所と恐れられていた清水山に現れたからであるし、逆にこのような存在が現れる事が、清水山の怖ろしさを保証するとも言える。

次に、中間達の犬が啗えだしてきた白木の箱である。紛れもない呪いの類いで、人を怖ろしがらせるに十分な物であるが、これは人の手による物であり、大入道や九尾の狐といった超自然的な怪異とは種類を異にしている。半七はこれを一応お早の仕業であろうと考えるが、結局は実物を見ないので何とも言えないと判断を留保する通り、その製作者、意図、実際に何らかの効果を発揮したのかどうか、

等の正確なところは謎のままに物語は幕を閉じる。正体不明の獣と白木の箱、この二つの要素は物語の中盤で登場しては一場の怪奇性を盛り上げただけで消えていった様にも見受けられるが、物語の最後までで不可思議さを残したままである事で、その舞台である清水山の怪奇性を最後まで保つことに役立つている。

つまり、主となる一連の事件が解決しても、清水山は最初から最後までその魔所たる性質を失ってはいない。そして、清水山の怖ろしさは大入道や九尾の狐といった妖怪のような幻想的怪奇の怖ろしさではない。謎の獣が現実存在し、白木の箱が現実の人の手によって作られている、その現実の延長線上にある怖ろしさなのである。

四、噂とその構造について

右のような物も取り込んで、作中ではいくつかの噂・伝説が語られる。整理して並べると次の様になる。

- 清水山には色々の怪異が有り、入ると禍があるという言い伝え
 - 清水山に現れる女の噂
 - 大入道の噂
 - 九尾の狐の噂
- これらの噂について先ず分かるのは、噂の発生の根源には清水山の存在があるという事である。清水山に奇怪な言い伝えが有る事も理由の一つとしてあるが、場所自体の空恐ろしいような様子もしばしば語られている。

ここには灌木や秋草が一面に生い茂って、闇の底から白い薄^{すすき}の穂が浮き出したように揺らめいているのも、場所が場所だけになんとなく薄気味悪くも思われた。

生い茂った灌木のあいだには高い枯れ草がおおいかかって、どこから吹き寄せたとも知れない落葉がまたその上をうすめていた。気のせいか何となく物凄い場所ではあるが、

昔からの言い伝えとそれに付随する一種不気味な場所性が合わさって、清水山は次の怪しい女の噂を作り上げるのに一役買っている。

清水山に現れる女の噂であるが、お早はそれ程に奇怪な行動をしていた訳では無い。それが清水山という「場所が場所だけに」恐れられる事となる。そしてその中で夜鷹が脅かされ、中間がお早の手拭いの下の顔を青い鬼と見間違えるが、これも清水山という場所により、世間に受け入れられる事になる。「元来が一種の魔所のように恐れられている場所だけに」女が怪異であるという事は世間の人々に信じられて行く。これからまた、女は大蛇の精である、柳の精である、と話を取り留めない方向へも向かって行って、お早の実態からは噂の内容がかけ離れていく。そしてこの噂がまた次の大入道の噂と九尾の狐の噂の下地となっている事を指摘したい。

大入道の噂は、清水山探検の折に、勝次郎の影を尾行した喜平と銀蔵が庄司の家の奉公人に引っぱたかれたという事が基になっている。二人はその正確な事実を知る事はない。だが、怪しい女の噂と異なり、噂の大本となった二人は、怪しい影と、自分達を殴った者の正体は賊か博奕打ちかと、はっきり人であると鑑定している訳である。噂の原因となる二人の考えでは、怪異に繋がるものは何もないのだが、広まった噂では初めの賊や博奕打ちという認識が大入道という妖怪になってしまっている。

九尾の狐の噂の発生も、その大本は喜平と茂八が清水山に踏み込んだ際に何かの獣に追われた事に端を発している。獣の正体はその時点では分からなかった事による怖ろしさはあるが、それが清水山には怪獣が住んでいるという噂になり、九尾の狐の噂になり、飛躍を見せる。又、噂の中で九尾の狐に喰われかかったのは喜平と銀蔵だが、実際に謎の獣に遭遇したのは喜平と茂八である。この様に、清水山の伝説に始まって、怪しい女、大入道・九尾の狐と、後の噂になる程に、噂の内容はいい加減かつ大袈裟になっている。

以上の事を整理して述べるに次のようになる。一番最初に、清水山という曰くを持つ場所が存在した。そこに怪しい女が現れる。清水山という場所に現れるので、その女は何かの怪異に違いないという事がより信じられやすくなって世間に広まった。そのような中でまた新しい事件が出来したので、これもまた怪異だろうと見る世間の風潮があつて、噂が簡単に信じられた。したがって、比較的出所

と鑑定のはっきりしている「何者かに殴られた」ということと「何かしらの獣」が「大入道」と「九尾の狐」という怪異の噂に容易に成長した、ということである。また、謎の獣の噂が成長していく中で何者かに殴られたという事が話されたので、この二つが同時に噂になったという事も、一方がそうならもう一方もそうだと、噂に尾鰭が付くのに拍車をかける事になったであろうと考えられる。この事を簡単に図示すると次の様になる。

清水山の伝承・場所性

←

← (怪しい女を怪異と信じさせる)

←

清水山の怪しい女の噂

←

← (ある程度はつきりした事を怪異に仕立てあげる)

←

大入道の噂↑(絡まり合って成長) ↓九尾の狐の噂

このような順で、前の噂が後の噂を作り上げる後押しするということ構造になっていると言える。

五、お早について

本作の中心人物とも言えるお早であるが、彼女は何かしらの病を体に抱え込んでいる。その病について半七は次の様に推測している。

その家には悪い病気の筋がある。おそらく癩病か何かの血管を引いているのだろう。おやじは幸いに無事でいても、その子供たちは年頃になると悪い病が出る。

その女は顔に青い痣があるというじゃあねえか。それはもう病気の発しているのを何かの絵具えのぐで塗りかくして、痣のように誤魔化しているんだ。

だが、地の文中の女中お兼の言では「お早は顔や手足に青い痣があるのだ」とある。その後も「青い痣にいろどられている女」、「痣女」と表現されている。半七の言う様に癩病の症状を絵具で隠しているのではなく、単に青い痣の浮かぶ病気なのかもしれない。癩病はハensen病の古い呼び名であるが、二つが完全に重なるわけではない。近代に入るまでは癩病と呼ぶ中には様々な皮膚病の類も含まれていた。お早が今のハensen病であったかどうかは不明であるが、作中の時代ではどちらにせよ癩で一括りである。

近世の癩病についての認識は家筋説Ⅱ遺伝説が支配的であり、その忌避は「癩の家筋の排除は「家」を守るための「見識」となって

いた。」⁽⁴⁾という程のものであった。

これが人なみの娘でござりましたなら、たといどんな片輪者でござりましようとも、勝次郎さんにもよく頼んで、なんとか添い遂げる御相談のしようもあるのでござりますが、どうもそれがないですねの……

右の藤左衛門の言葉からはよくそれが伺える。藤左衛門の家は奉公人が数十もいる程の百姓家、片や勝次郎は長屋住みの大工、その立場の差をもつても頼という病は如何ともし難いのである。

そして、近世はもちろん、時代を大きく下つても癩病の感染源は遺伝説が優勢であった。アルマウェル・ハンセンが明治四年(一八七三)にらい菌を発見した後、明治三〇年(一八九七)一〇月、第一回国際らい会議で癩病の伝染説が国際的に確立する。日本でも明治四〇年(一九〇七)に「法律第十一号 らい予防に関する法律」が制定される。しかし一般社会において癩病が伝染性である事は中々浸透していかなかった。⁵⁾本作執筆時の綺堂がどれ程正確な知識を有していたかは不明である。作中、勝次郎の感じるお早の怖ろしさの原因に青い痣のある鬼と見紛う程の顔と、癩病があることは疑いを入れられないが、その恐ろしさは当時非常に重いものであっただろう。

ここにお早の悲しさがある。周囲の人間だけでなく、お早本人も思い人と添い遂げるという事がほぼ不可能事だということは分かっ

ていたであろう。なので見染めた勝次郎には金を遣つてまで会つてもらわねばならなかった。そしてこのような境遇に対してお早は一途な性格となつている。勝次郎の仕事が終わり、雑司ヶ谷へとやつてこなくなると、自らが雑司ヶ谷―神田間を通つて勝次郎に会いに行く。勝次郎に会う事を断念せざるを得なくなつた時は半狂乱にもなり自殺未遂もする。二人が会う場所も雑司ヶ谷では土蔵の奥、神田では清水山と薄暗い場所であった。痣のある顔を見られたくないという繊細な心持が表れている。

先に見た様に、この事件には多くの噂が纏わつていた。そして江戸という一大都市空間の中で様々な人間が様々な関わり方をした。噂を恐れる者、真偽を確かめようとする者、商売に利用する者、迷惑を被る者等々。積極的な者も受動的な者もいるが、概して言えば、皆が噂に振り回された事になる。

お早の癩という病もまた同様で、お早本人も含めて、癩に対する認識はやはりその実態からはかけ離れたものだった。過去から長い時間をかけて作り上げられてきた癩に対する幻想、その時代の軛からは逃れることはできなかつた。常識とまでなつた考えでも、結局その中身は噂と大差が無い。一連の噂に人々の様に、お早は癩に対する認識によつて、その人生をも規定される事になつてしまった。更には、勝次郎と会う為に選んだ清水山という場、お早がこの場に取り込まれる様にもして関わつた事で一連の噂が生まれ、自身と恋人を死へ導くことになつてしまった。こうして見ると、お早こそが

最大の被害者だったと言う事も決して過言ではないだろう。

注

- (1) 清水晴風『神田の伝説』（神田公論社、一九一三年十月）
- (2) 日本随筆大成編集部『日本随筆大成（第一期）八』（吉川弘文館、一九七五年八月）
- (3) 大島正満『応用 動物事典』（北陸館、一九六二年二月）
- (4) 藤野豊『歴史の中の「癩者」』（ゆみる出版、一九九六年四月）
- (5) 山本俊一『増補 日本らい史』（東京大学出版会、一九九七年二月）

参考文献

- 大島正満『応用 動物事典』北陸館、一九六二年二月
山本俊一『増補 日本らい史』東京大学出版会、一九九七年二月
藤野豊『歴史の中の「癩者」』ゆみる出版、一九九六年四月
日本随筆大成編集部『日本随筆大成（第一期）八』吉川弘文館、一九七五年八月
今内孜『半七捕物帳辞典』国書刊行会、二〇一〇年一月
清水晴風『神田の伝説』神田公論社、一九一三年十月

「三つの声」小考

立教大学 栗田 卓

1 「声」の錯誤をめぐる構造

『新青年』大正十五（一九二〇）年一月号に発表された「半七捕物帳」の一篇、「三つの声」は以下のような梗概である。元治元年三月二十一日の暁方、芝、田町の鑄掛屋庄五郎が川崎の厄除大師へ参詣するために家を出た。家には女房のお国と小僧の次八が残された。やがて表の戸をたたき何者かがあったが、お国は寢床のなかからすでに庄五郎が家を出たことを告げた。しばらく後に、再度表の戸が叩かれ、「露月町の平七」の来訪があったかと問う。それ親方の庄五郎の声であると判断し、次八は平七の来訪の無いことを屏越しに回答した。やがて三度目の声が「おかみさん」とお国を呼んだ。「隣の藤次郎」の声であると判断したお国は庄五郎が家を出たことを告げるが、藤次郎は庄五郎にも平七にも会っていないと答えた。お国が戸を開けると、そこには藤次郎の姿があった。

その日の夕方に、庄五郎の死体が芝浦の沖で発見された。状況から、庄五郎は海に転落し、そのあとへ平七が来て、茶屋の葎簀むすびのなかへはいつて寝込んでしまった。藤次郎が来たときにはそこには誰もおらず、藤次郎は自分は置き去りにされたものと判断し、庄五郎の家へ確認に戻ったのだと断定された。

数日後、藤次郎と平七が往来で喧嘩をする。原因は未亡人となつたお国をめぐる色恋沙汰であつた。喧嘩に立ち合つた岡つ引きの子分、妻吉は二人を番屋に引き立てた。妻吉は平七がお国の亭主を亡き者にしたいと発言したという事実を抑えており、平七を柱にくくりつけて拘留し、藤次郎は帰した。妻吉たちの推理は、当日の朝庄五郎が出て行つたあとで、平七がその門を叩いたのは、偽装工作であるという判断に基づいている。実際には庄五郎よりも先に行き、庄五郎を海へ突き落として、引返し門を叩いて、これから出かけて行くようにみせかけたのだという推理である。そして、二番目の「声」は藤次郎が冗談で庄五郎の声真似をしたものであると、藤次郎自身¹が証言していた。

だが、この話を聞いた平七はその推理に違和感を覚え、独自調査を始める。お国と次八に聞き込みをしたところ、お国は最初の「声」はたしかに平七のものだが、二度目の「声」の時は眠っていて聞いていないことがわかる。次八も夢現の状態²で正確な判断はできなかった。

そこまで聞いたときに、平七は柳の木のかげに藤次郎がいることを発見し、取り押さえられた藤次郎のふと漏らした一言が追求されるが、第一にこのテクストの特徴として「声」という要素が、犯罪を論証する要素として焦点化されていることを確認したい。「三つの声」には、その原典として中国の小説「三娘子」が存在することは、

すでに先行研究に詳しいが、「三娘子」では張潮一人が「おくさん」と「声」をかけたのに対し、「三つの声」では三人が「声」をかけており、この「声」の認識をめぐる錯誤がテクストに謎を生成している。「三つの声」はそれぞれ、次のように記述されている。

① 一つ目の「声」

あたたかい春のあかつきの眠りをむさぼっていると、やがて表の戸を軽くたたたく者があつた。

「庄さん、庄さん」

これに夢を破られて、お国は寢床のなかから寝ぼけた声で答えた。

「内の人はもう出ましたよ」

外ではそれぎり何も云わなかった。かれを怪しむらしい町内の犬の声もだんだんに遠くなって、表はひっそりと鎮まった。

② 二つ目の「声」

お国はまた眠ってしまったので、それからどのくらい時間が過ぎたか知らないが、再び表の戸をたたく音がきこえた。

「おい、おい」

今度はお国は眼をさまさなかつた。二、三度もつづけて叩く音に、小僧の次八がようやく起きたが、かれも夢と現³の境にあるような寝ぼけ声で寢床の中から訊いた。

「誰ですえ」

「おれだ、おれだ。平公は来なかつたか」

それが親方の庄五郎の声であると知つて、次八はすぐに答えた。
た。

「平さんは来ませんよ」

外では、そうかと小声で云つたらしかつたが、それぎり黙つてしまつた。眠り盛りの次八は勿論すぐに又眠つたかと思うと間もなく、又もや戸をたたく音がきこえた。

③三つ目の「声」

今度は叩き方がやや強かつたので、お国も次八も同時に眼を醒ました。

「おかみさん。おかみさん」と、外では呼んだ。

「誰……。藤さんですかえ」と、お国は訊いた。

(中略)

床の中で挨拶もしていられなくなつて、お国は寝衣のまま起きて出た。お国はことし二十三の若い女房で、子どもがないだけに年よりも更に若くみえた。表の戸をあけて彼女がその仇めいた寝乱れ姿をあらわした時、往來はもう薄明るくなつていたので、表に立っている男の顔は朝の光りに照らされていた。これは隣り町に住んでいる建具屋の藤次郎で、脚絆に麻裏草履という足ごしらえをしていた。

〔三つの声〕の到来するのが、「暁方」という夜と昼の間隙である不分明を招き入れる時間帯であり、「声」の受容者であつた女房のお国と小僧の次八もまた「眠り」という認識の攪乱される領域にその存在が措定されている。そして、そもそも「声」という音声現象と視覚による認識が、テキスト上に明確に差異化されていることも注目し得る。①②においては、受容者のお国と次八がともに「夢と現の境にあるような」と表現される「寝ぼけ」た状態で聴覚で「声」の主を判断するのに対し、③では「表に立っている男の顔は朝の光りに照らされていた」とあるようにお国によって遮蔽物である「表の戸」が開放され、視覚的に「声」の主として藤次郎は認識される。聴覚性にたいする視覚性の優位という近代的感性を反復するようなこの認識の階梯がこの冒頭で示されているわけだが、テキスト全体をこの認識が貫いているかといえ、その限りではない。視覚性と聴覚性の階梯の逆転は、奇妙な形である権力構造をテキスト上に形成している。その構造は「岡つ引」という組織のあり方と密接に関係し、また「探偵小説」としての「三つの声」に特異な亀裂を走らせている。

2 「岡つ引」の位置

「三つの声」には、論理の整合性を重視する「探偵小説」としては明らかに過剰な要素が含まれている。半七は次の引用箇所のような

推理をもとに、藤次郎の犯罪を立証しようとする。

「大木戸で待ち合わせる約束をいたしましたので、そこへ行ってみますと誰もまだ来て居りません。しばらく待つて居りましたが、庄五郎も平七も見えませんでしたので、どうしたのかと思つて念のために引返してまいつたのでございます」

「その時にこの家の戸は締まっていたな」

「はい。締まっていますので叩きました」

「そうして、おかみさん、おかみさんと呼んだな」

「はい」

「それ、見ろ。馬鹿野郎」と平七は叱るように云つた。「問うに落ちず、語るに落ちるとはそのことだぞ」

「なぜでございます」と、藤次郎は不思議そうに相手の顔を見あげた。

「まだ判らねえか。よく考えてみる。約束の庄五郎が見えねえというので、ここの家へ尋ねに来たのなら、なぜ庄五郎の名を呼ばねえ。まず庄五郎の名を呼んで、それで返事がなかったら女房の名を呼ぶのが当たりめえだ。初めからおかみさん、おかみさんと呼ぶ以上は、亭主のいねえのを承知に相違ねえ」

藤次郎の顔色はにわかになつた。かれは吃りながら何か云おうとするのを、押さえ付けるように平七は又云つた。

この平七の推理は蓋然性に過ぎず、十分な論理的整合性を備えてはいない。何故なら、「おかみさん、おかみさん」と呼ぶことは単なる確率の問題に過ぎず、十分な論拠とはなり得ないからである。そのことは、不確定性・恣意性を抑圧・隠蔽するように文末に登場する「押さえ付ける」という反論を不可能にする表現が使用されていることから指摘できる。そして、この箇所が続く次の引用では、その推理の整合性の不十分さがどのように覆い隠されているのかが明瞭に表されている。

藤次郎は藁がえるのように店さきの土に手を突いたまま身動きもしなかつた。その顔は藍のように染めかえられて、ひたいからは青汗がにじみ出していた。

「素人だ。きつかけを付けてやらなけりや口があげめえ」と、平七は熊蔵をみかえつた。

「野郎、しつかりしろ」

熊蔵はいきなり平手で藤次郎の横つ面を引つぱたくと、かれは眼がさめたように叫んだ。

「恐れ入りました」

ここで明らかになるのは〈暴力〉としての「平手」が「恐れ入りました」という〈白〉を導き出しているという事態である。不安や恐怖による強迫観念を抑圧する機能を科学と論理によつて担保す

るものが探偵小説の機能であるとするならば、もはや「三つの声」というテクストにおいてその機能はグロテスクに転倒し、論理無き暴力装置の、そして生贄を創り出す権力の主体としての探偵を創造することを導くだろう。ところで、しばしば勘違いされるのだが、半七は公儀の役人である「同心」ではなく、あくまで私的に「同心」に協力するいわば私立探偵的な存在としての「岡っ引」であり、特に江戸においては公的な権力の担い手ではない。もはやそこで探偵とは特権的なものではなく、ベンヤミンがいうように「誰でもが陰謀家めいたところを身につけているテロルの時代には、誰でもがまた、探偵の役を演ずる廻り合わせにもなる」³状況が到来したことを意味している。その文脈で注目しているのは、半七の次の台詞だろう。

「伊豆屋は伊豆屋、おれは俺だ。三河町の半七は別に調べることがあるんだ。やい、藤次郎。貴様は三月二十一日の朝、なんでこの家の戸を叩いた。」

「伊豆屋」とは高輪の「岡っ引」であり、妻吉の親分である伊豆屋弥平のことを意味する。弥平は半七を下手人として挙げ、当時の江戸城下および要地の警護を担当していた「大番屋」に送り込み、藤次郎を釈放している。だが、半七は「縄張り」を逸脱しすでに一度解決に至った犯罪を再度捜査し、真犯人を指摘する。この半七の奇妙な振舞は一見すると、反権力的な構図をテクストに導入させるよ

うにも見える。すなわち、大衆の英雄としての半七という探偵像だが、ベンヤミンは先の引用の別の箇所でも次のようにも述べている。

大都市の群衆は、それをはじめて目のあたりにした人びとの心に不安、嫌悪、戦慄を呼び起こした。(中略) 群衆と軍隊は模範的な友好関係を結ぶ。すなわち警察が略奪者たちと手を結ぶ、全体主義国家にとって模範となるような友好関係である。

事実、テクスト上には藤次郎と平七の顛末は描かれていない。半七の推理は藤次郎の〈告白〉で幕を閉じ、その真偽が公的論理的に問われた痕跡をもはやテクスト上に確認することはできない。つまり、半七の推理と「伊豆屋」の推理はともに真偽を決定不可能なものとして描かれているのである。そのようなグロテスクな転倒を伴う藤次郎の〈告白〉は次の一文で閉じられている。

「恐れ入りました」

かれが縄つきで鍔掛屋の店さきから引つ立てられる頃には、四月の日もさすがに暮れかかって、うす暗い柳のかげから蝙蝠が飛びだしそうな時刻になっていた。

ここで確認しておくべきことは、冒頭の「暁方」と共通する「うす暗い柳のかげから蝙蝠が飛びだしそうな時刻」という日中と夜間

の境界の融解する時間帯、すなわちそれは人びとの感覚を不明瞭にする空間の共通であり、そして、冒頭に提示された「声」、すなわち聴覚性の不確定さと〈告白〉を示す「恐れ入りました」という音声の関係だろう。先に確認したように、冒頭で視覚性に対する聴覚性の認識の劣位が示されたテクストにおいて、解決の場面では〈犯罪〉が〈暴力〉を介して音声によって〈告白〉されるといって構図が逆説的／転倒的に提示され、そしてその発話された環境もまた反復されている。恐らくこのような自己言及的に探偵行為を解体していくテクストの方法は「三つの声」の末尾に付け加えられた奇妙な一節と無関係ではない。

3 相対化される〈暴力〉と可能性としての「探偵小説」

「三つの声」の末尾には、すでに「岡っ引き」を引退した半七老人が明治期以降と推測される作中時現在から、「三つの声」の事件を回想している箇所が挿入されている。そこで、半七老人は次のような認識を示している。

それから罪人の横つ面をなぐつたりする。今からみれば乱暴かも知れませんが、玄人は度胸が据わっているから、いよいよいけないと思えば素直に恐れ入りますが、素人にはそれがなかなか出来ない。いえ、強情で云わないのではない。云うことが出来ないのです。それを軽い罪ならば格別、ひとつ間違えば自

分の首が飛ぶというような重罪が発覚したかと思うと、大抵の素人はぼうつとなつてしまつて、早くいえば酒に酔つたようになつて、なんにも云えなくなつてしまうのです。といつて、いつまでも黙らせて置いては埒があきませんから、そういう時には氣つけの水を飲ませてやるか、さもなければ横つ面を引っぱたいてやるのです。そうすると、はつと眼が醒めたようになつて、初めて恐れ入るといわけです。たとい悪い事しても、むかしの人間はみな正直だから、調べる方でもこんなことをしたのですが、今の人間は度胸がいいから、こんな世話を焼かせる者もありますまいよ」

引用箇所には半七老人の自らの過去の行為を「乱暴」であつたという認識が存在しており、「たとい悪い事しても、むかしの人間はみな正直だから、調べる方でもこんなことをしたのですが、今の人間は度胸がいいから、こんな世話を焼かせる者もありますまいよ」と「むかし」と「今」の差異をもつて〈暴力〉を相対化する可能性が示されている。むしろそれは探偵行為の不要性、つまり主体と犯罪Ⅱ動機が無媒介に直結し、論理的推論の介入することなく〈暴力〉的に〈自白〉に至る可能性を示唆するものでもあるが、同時に、探偵行為の不可能性、つまり主体と犯罪Ⅱ動機のあいだに修復不可能な亀裂が発生し、いかなる論理的推論をもつても因果関係を立証することが不可能な状況の到来をもまた意味している。そこでは、

すべての因果律が解体され、それによつて権力の網の目を出し抜き逃走を図る願望が込められていたことが読み取れる可能性は看過されてはならない。だが、結果的にこのことは徴候として示されるにとどまり、「三つの声」を最後に「半七捕物帳」シリーズは約八年の中断に至り、この問題は沈黙の果てに追いやられる。⁽³⁾

結語

フランコ・モレットティが指摘するように、⁽⁴⁾探偵小説が「不合理」や「無意識」への強迫観念からぬけたための「合理」の勝利の形式として成立したのであれば、「三つの声」というテクストに現象しているのは、「不合理」を「合理」化する際に生じる〈暴力〉へのまなざしであり、それを導入することで探偵小説の閉じた解釈的パラダイムを侵犯し、決定不可能なものとして「解決」が提示されている。このような形式に綺堂がどれほど自覚的であったのかは本小考の範囲を逸脱するが、少なくとも、テクストの持つ多様な可能性の一部として、本小考は「三つの声」における探偵小説形式への自己言及的構造を指摘した。今後、「半七捕物帳」の未踏の可能性は十分に検討される必要がある、本小考はそのささやかな一歩である。

注

(1) 有坂正三『「半七捕物帳」と中国ミステリー』（文芸社、平成十

七（二〇〇五）年八月）

(2) 「同心」と「岡っ引」の区別に関しては、林美一『江戸の二十四時間』（河出書房新社、平成元（一九八九）年二月）を参照した。

(3) ベンヤミン「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」（引用は野村修訳、『ベンヤミン著作集』6、晶文社、昭和四十六（一九七五）年九月）

(4) このような認識の徴候として、半七は推理の途中で「どうだ、おれの天眼鏡に陰りはあるめえ。来年から大道うらないを始めから鼻屑にしてくれ」と述べており、自身の推理が「うらない」に類するものに過ぎないという自覚があることは注目に値する。

(5) 「半七捕物帳」シリーズは「三つの声」以降、『日曜報知』昭和七（一九三二）年二月二十八日〜六月五日に発表される「白蝶怪」まで執筆が中断されている。このことの意味は充分に検討されなければならぬが、紙幅の関係で本小考において触れることはかなわない。おそらく、そのことは綺堂のテクスト内部で充足される問題ではなく、震災を始めとする同時代の様々な複合状況を検討する必要がある、いずれかの機会です別稿を用意する準備がある。

(6) フランコ・モレットティ「手がかり」、（北代美和子訳、『ドラキュラ、ジョイス、ホームズ』、新評論社、平成四（一九九二）年七月）

「ズウフラ怪談」小考

河津澄江

一、梗概

「ズウフラ怪談」は昭和九年十月『講談倶楽部』に発表され、昭和十三年十二月の新潮社版『平七捕物帳』に収録されている。初出、初刊、テキストに大きな異同は見受けられない。梗概は以下の通りである。

安政四年九月、駒込富士前町の裏手（富士裏）から鷹匠屋敷附近にかけて、怪しい噂が立った。闇夜に往来する者があると、この世の者とは思われない声呼びかけてくるのである。九月末の雨の気配がする夜に、奥州浪人の岩下左内は噂の正体を突き止めようと弟子の池田喜平次と酒屋の息子である伊太郎を連れて家を出る。しかし、なかなか戻らないために心配した他の弟子達が探しに出ると、供をした二人の弟子と出会う。二人は怪しい声が左内を呼び、左内はそれに応じて声のする方へ走って行ってしまい、見失ったという。慌てた弟子達が二組に分かれて左内を探すと、伊太郎を先立ちとした組が左内の遺体を発見する。

五日後、半七は子分の亀吉と搜索を開始する。半七は噂の正体はズウフラであることを推理する。そして、植木屋の嘉兵衛から喜平次と伊太郎の情報、長助という男が怪しい声に釣られて殴打されたことを聞き出す。

半七は嘉兵衛の話を基に伊太郎と左内の妻、お常との不倫関係を推理し、その裏を取るために伊太郎の離縁した妻の実家へ赴く。更に喜平次と伊太郎が犯人だと目星を付けた半七は、左内の葬儀が行われる場で張り込んでいれば何か「引っかかる鴨があるかも知れぬ」と左内の葬儀が行われる道場へ向かう。

葬儀の最中、「御新造さん……。」とお常を呼ぶ怪しい声がある。半七と亀吉が声のする方へ石を投げると、屋根から何者かが落ちて来た。それは質屋の息子である辰次郎であった。

辰次郎は「薄馬鹿」で、長助に乗せられて質物のズウフラを持ち出し、通行人を脅かすいたずらをしていた。それが噂になり、辰次郎と犯人達の間には直接の関係は無かったが、元から左内殺害を企てていた金目当ての喜平次と女目当ての伊太郎は、噂を利用して、殺害を実行する。その殺害現場を偶然に辰次郎は目撃していて、良心の呵責からお常に注意を与えようと葬儀で呼びかけたのだった。

しかし、お常も左内殺害の計画を知っており、結局は伊太郎、お常が死刑、喜平次は切腹、長助は所払い、辰次郎の両親も厳罰を受けた。辰次郎自身は吟味中に町内預けになっていたが抜け出し、富士裏の森で縊死した。すると彼の幽霊が出ると騒ぎになり、半七老人はこれを振り返って「世の中に怪談の種は尽きない」と語り終える。本稿では、事件のきっかけを作りながらも物語の最後に登場することとなった辰次郎に焦点を当てる。

二、辰次郎

辰次郎は質屋の息子で、十九歳である。半七老人は辰次郎について「一人前には通用しない薄馬鹿」と述べている。辰次郎が「薄馬鹿」だから質物を持ち出し、長助におだてられて「悪いいたずら」をすることになる。このいたずらが噂になり、伊太郎と喜平次にとっては「勿怪の幸い」、左内にとっては「飛んだ災難」となる。また、左内殺害を目撃した後、長助に止められていたが「薄馬鹿」なためにズウフラを持ち出してしまふ。それが「長助殴打事件」となり、結果として長助は所払いになる。そして「いかに薄馬鹿の人間でも、見す見す闇討ちの一件を知っていながら、口を結んでいる」ということは、さすがに気が咎めてならない」ので「馬鹿相当の知恵を出し」、お常に「岩下の御新造さん……お経なんぞを上げるのはお止しなさい」と注意を与えるのだが、この行為がきっかけとなり、犯人は全て捕らえられる。

また、半七老人は辰次郎の育った環境について、「馬鹿息子が質物を持ち出して毎晩あるき廻っているのを、親たちも店の者も気がつかなかったというのは、あんまり迂闊な話です（中略）片輪の子ほど可愛いとかいって、親たちが甘やかし過ぎたのが悪かったんです」と述べている。つまり、半七老人が言いたいのは、親が甘やかしたせいで辰次郎が殺人事件のきっかけを作ってしまった、殺害された左内は勿論、お常、伊太郎、喜平次の三人も命を落とすことになった。更に長助は所払い、深沢は面目を失うはめになり、辰次郎の両親は

「きびしいお咎め」を受け、最後は辰次郎自身の命も消えてしまったということである。

半七老人はこの様に、「薄馬鹿」が事件を引き起こしたと滔々と説明するが、「馬鹿も馬鹿にはなりません。辰公が屋根から転げ落ちて、わたくし共に取り押えられた為に、それから口が明いて闇討ちの秘密もはつきりと判ることになったんです」と、「薄馬鹿」であるからと言って見くびれないという感想も付け加える。

長助は辰次郎を「馬鹿とあなどって不意打ちを食」い、半七老人も「馬鹿も馬鹿にはなりません」と、辰次郎の行動の意外性を語ることから、長助も半七老人も、辰次郎の思考を推察できなかったことが分かる。辰次郎は「薄馬鹿」であるために「一人前には通用しない」と思われているが、それが故に反って、予想外の行動や考えをする者として描かれている。

以上を整理すると、以下の三点にまとめられる。

- 一、「薄馬鹿」なために人から受けた影響が行動に反映している
- 二、「片輪の子ほど可愛い」ために甘やかされ過ぎたことが事件の発端となった

- 三、周囲は彼の思考能力を劣ったものと考えていたために不意を突かれている

三、「薄馬鹿」という言葉

半七老人は「薄馬鹿」という表現を繰り返して、辰次郎が「薄馬鹿」であることが事件の原因であったと語っている。明らかに否定的な語り口であるが、どの様な意味で否定的なのか。

「ズウフラ怪談」の約二年后に発表された「地藏は踊る」⁽¹⁾という作品がある。この作品に登場する三人の人物に対して、半七の子分である亀吉は調査の結果を以下の様に報告する。

「小坊主は十六で年の割には体も大きく、見かけは頑丈そうですが、ふだんから薄ぼんやりした奴で、別にこうと云うほどのこともないそうです。それから了哲という納所坊主、コイツも少し足りねえ奴で、悪いこともしねえが酒を飲む。まあ、こんな事ですわね」

「花屋の親子は……」

「花屋の定吉、これも近所で評判の正直者ですが、可哀そうにひどい吃で、満足に口が利けねえ位だそうです(中略)。」

こう列べてみると、正直か薄馬鹿か、揃いも揃った好人物で、一人も怪しい者はない。

「正直か薄馬鹿か、揃いも揃った好人物」は地の文だが、半七の視点からの認識である。つまり、半七は「正直」と「薄馬鹿」を別の存在ではあるが、「好人物」という同一の枠組みに属する存在として

捉えている。そして彼らは、「怪しい者」ではない。

「ズウフラ怪談」に戻って、半七老人によれば、辰次郎は「いかに薄馬鹿の人間でも、見ず見ず闇討ちの一件を知っていながら、口を結んでいるということは、さすがに気が咎めてならない」ので、お常にズウフラを使い忠告をした。良心の呵責に悩み、自分なりの行動を起こす点に、半七は辰次郎の「正直」さを感じたのではないか。「地藏は踊る」は事件の起こったのが安政六年、「ズウフラ怪談」は安政四年なので、半七に「正直」と「薄馬鹿」を隣接した存在と意識させたのは辰次郎かもしれない。

そのように「怪しい者」ではない辰次郎が、一連の事件を巻き起こした。それにいたる経緯は前節のまとめに記した通りであるが、その様な経緯を生んだのは、ズウフラである。

四、辰次郎とズウフラ

本作の約半年後に発表された「妖狐伝」⁽²⁾では、マッチを知らない時代の人々が、犯人が投げた火の付いたマッチを火の玉だと思って恐れたのを、半七老人が「実に子供だましのような話」で、「ズウフラ怪談」の型にはいる」と述べる場面がある。「ズウフラ怪談」に半七老人が言及するのは、人々が恐れたものが「今から考えると、実に子供だまし」のような仕掛けであったためだが、「今から考えると」という言葉に着目すべきだろう。例えば、「後から考えると」等ではなく、語られる事件の時代と語っている「今」との距離が、故

意に記されているのであって、それはマッチもズウフラも共に西洋伝来の新技術であり、それを知らない人々にとっては怪異となる、それが「ズウフラ怪談」の型なのである。

ズウフラが当時の人々にとつて想像し得ない技術であり、怪異となることを分かっていた長助は辰次郎をそそのかし、「面白半分に向來の人を嚇かしていた」。辰次郎は、周囲から「一人前には通用しない」と言われ、劣っていると見なされていたが、ズウフラによつて口(声)を拡張することが可能となった。そして、その新技術を手に入れたことで、周囲より突出することができた。しかし、ズウフラによつて手中にした能力は「薄馬鹿」な辰次郎には制御できず、様々な悲劇を起こす引き金となり、同時に事件を解決する鍵ともなったのである。そのため、半七老人は「辰次郎は薄馬鹿」と繰り返すのである。だが、左内殺害を目撃していることから「気が咎め」、「馬鹿相当の知恵を出し」た辰次郎は、ズウフラを嚇しや暴力という人を害するため使用するのではなく、人に注意を促すという使い方をした。半七老人が「馬鹿も馬鹿にはなりません」と語ったのは、このことを通して、辰次郎に正直さという評価を付けたためである。

舞台となった安政四年は、「世はだんだんに闇がしくなつて、異国の黒船とひと合戦あろうも知れないという、気味の悪いうわさの伝えられる時節」であり、「太平の夢を破られた江戸市中」は、その不安から町人でも「遊芸よりも武芸の稽古に通う若者があらわれて来

た」。「気味の悪いうわさ」が、かなりの真実味を帯びて人々に流布していたことが分かる。

また、たとえばアメリカの実業家サイラス・フィールドが大西洋横断電信ケーブルの敷設に第一回目の挑戦をしている。電話の先駆的実験なども始まり、電信電話による世界的通信網が飛躍的に拡大し始める時代である。

一方で本作品が発表された昭和九年は、函館大火や室戸台風、東北地方大凶作等の天災が続き、斎藤実内閣は帝人事件で総辞職と、暗い出来事が社会を襲い、第二次世界大戦へと向かっていた時期である。そしてまた、国際電話会社の発足、日本―フィリピン間及びオランダ領東インド間での国際電話開通といった新技術の登場と、それに伴う「軍用電気通信法」や「私設無線電信電話を軍事上必要な通信用に供する件」⁴という法律が制定された年でもある。

以上を鑑みると、本作品は安政四年と昭和九年に於ける社会の不安な空気と通信技術の発展を重ね合わせ、新技術に翻弄される人々を描き出したと読めるのではないだろうか。

注

- (1) 初出は『講談倶楽部』昭和十一年十一月号
- (2) 初出は『講談倶楽部』昭和十年二月号
- (3) 『大阪毎日新聞』昭和九年十月二十一日
- (4) 武田晴人『日本の情報通信産業史2つの世界から1つの世界へ』平成二十三年五月、有斐閣
- (5) 松本栄寿「大西洋の発見」『オートメーション』四十七号 平成十四年十月、日刊工業プロダクション

参考文献

- 大槻文彦『言海』明治三十七年二月
塚本哲三編『有朋堂文庫 花暦八笑人、滑稽和合人、妙竹林話七偏人』昭和二年七月、有朋堂書店
中外商業新報 昭和九年三月二十六日
『半七捕物帳』昭和十三年十二月、新潮社
『半七捕物帳(五)』昭和三十三年九月、角川書店
稲垣史生『統・時代考証事典』昭和六十年十月、新人物往来社
平田勝政『戦前の教育実践分野における「精神薄弱」概念の歴史的研究Ⅰ(上)』—東京高師附小「特別学級」歴代担任教師の検討を中心に—平成五年六月、長崎大学教育学部教育学科研究報告
『岡本綺堂伝奇小説集其ノ三 怪かしの鬼談集』平成十一年七月、原書房
- 『KAWADE夢ムック文藝別冊(総特集) 岡本綺堂』平成十六年一月、河出書房新社
岡田喜一郎『半七捕物帳お江戸歩き』平成十六年九月、河出書房新社
『編集復刻版 知的・身体障害者問題資料集成(戦前編)』平成十七年十二月、不二出版
大泉溥編『日本の子ども研究—明治・大正・昭和—第十一卷 障害児実態調査の戦前と戦後』平成二十二年九月、クレス出版
今内孜『半七捕物帳事典』平成二十二年一月二十五日、国書刊行会
東雅夫編『百物語怪談会』平成二十五年七月、筑摩書房
有山輝雄『情報覇権と帝国日本Ⅱ通信技術の拡大と宣伝戦』平成二十五年八月、吉川弘文館

「大阪屋花鳥」小考

高橋 昭 男

はじめに

「大阪屋花鳥」は、『講談倶楽部』昭和九年（一九二二）十一月号の巻頭小説として、「大阪屋花鳥——半七捕物帳 第四話 岡本綺堂 富田千秋畫」で掲載されたのが、初出である。「第四話」という表示は、『半七捕物帳』の第四作という意味ではない。大正六年一月に『文芸倶楽部』に第一作として「お文の魂」が発表されて以来、大正十五年一月まで、複数の雑誌に五十作を上回るシリーズとして掲載されていたのが、昭和七年まで足かけ七年間中断する。『講談倶楽部』には、昭和九年八月号から再掲載されるのだが、その四回目が「大阪屋花鳥」ということなのである。目次には、「大評判大人気の半七捕物帳」と角書があり、再掲載後も広汎な読者層に支持されていたことが分る。文体は旧かな、総ルビで、漢字を多用している。テキストに用いた光文社版と照合すると、多くの漢字を仮名に改めたのと、数カ所の送り仮名の変更を除いて、文章そのものに異同はない。

本作は十九歳の半七が、後に養父となる神田の目明し吉五郎の見習いの頃の話で、下つ端の半七が描かれるのは本作のみである。天保十二年から十四年にかけての、解決までに時間を要した事件で、老中水野忠邦による「天保の改革」の時期とほぼ同時期にあたる。

事件の構造が早い時期に見通せたのにもかかわらず、足かけ三年と、事件解決に時間を要したのは、主犯の手がかりがつかめず、大阪屋花鳥にたどりつくまでに、一年近くかかり、従犯の小左衛門・お節の親子の消息がつかめたのが、二年後であったという設定による。したがって、光文社版で五十ページを越す長さになり、しかも全七章の第六章目になって、ようやく主犯の大阪屋花鳥が登場するという、物語の展開の意外性が眼目となっている。ただし、いきなり大阪屋花鳥では、唐突すぎて読者に違和感を与える懸念があつてか、冒頭に明治三十年の吉原の大火をきっかけにして、さりげなく大阪屋花鳥のプロフィールを半七老人に語らせているのが、綺堂のストーリーテラーとしての腕の冴えであろう。大阪屋花鳥は実在した人物であるが、実在の人物名のみで『半七捕物帳』シリーズのタイトルに揚げられているのは、本作だけである。

梗概

天保十二年の三月、浅草観音のお開帳で参詣人の混雑する中、日本橋北新堀の「鍋久」という鉄物屋かざものの親子連れがあつた。当主の久兵衛はまだ二十歳の若者である。それに、母のおきぬ、女中のお直、小僧の宇吉の四人連れがお参りを済ませた帰り、女の声で「あ、もし……」。ひとりの男の手が久兵衛のふところから紙入れを出そうとしている。巾着切りだった。警告をした声の主は十七、八の容貌かたちの美しい娘で、父の病氣平癒のために観音様に日参している事だけを

話して、名も告げず立ち去った。母のおきぬは、娘の物腰のしとやかさに強く惹かれる。娘はお節といい、父の浪人磯野小左衛門との二人暮りであった。それからふた月あまりの後、おきぬのたつての望みで、久兵衛とお節の縁談がまとまり、六月はじめの吉日に、興入れとなる。はた目にも、仲むつまじい若夫婦に見えていたのだが、

七月二十九日の朝のこと、突然お節の拳動がおかしくなる。夜の十時ごろ、ただならぬ久兵衛の叫び声がかきこえるや、お節は顔も隠れるほどに黒髪を長く振り乱して、表に飛び出し、そのまま目の前の新堀川に飛び込んだ。椿事はこれだけではすまず、主人の久兵衛が何者かに頸筋を斬られて、倒れており、すでに息絶えていた。お節が店を跳びださず、剃刀を投げつけたところから、狂ったお節が久兵衛を殺害し、入水したものと思われ、検死の役人らもそう鑑定した。

事件は神田の目明し吉五郎の耳に入る。八月八日の朝、自分の徳次と、まだ駆け出しの半七は鍋久の店へ出掛け、事件を洗い直す。おとといの夕方、品川の弥平という人物が来て、夜釣りで見つけた女の死骸の着衣の片袖を持ち込む。母親のおきぬは、お節の片袖に相違ないということで、菩提寺におさめて回向し、弥平には十両の金を渡した。さらに事件のおこる前に、二度、盗難があり、一度目は二百両、二度目は百八十両が盗まれたという。半七はこう推理する。お節は生きている。金を盗み、久兵衛を殺したのはお節ではなく、別人である。徳次は、お節、父親、替玉の女、品川の男、その他大

勢が徒党を組み、鍋久の家を荒らそうと企んだものにとらむ。一方、半七は山谷の小左衛門宅の見張りを続けていたある日、鍋久の小僧宇吉を見かける。宇吉はお節や店の若い衆新次郎から小遣金を貰って、六月以来、山谷の小左衛門方に五、六たび使いに来ていたのだ。しかも店の女中のお直が昨日、暇を出されたという。

半七が小左衛門の家を探りに行くと、お直とおぼしき声で、「おかみさんは生きていて、どこかに隠れている」と叫んでいる。小左衛門は狼狽しつつも脅しにかかる。そこへ、新次郎が現れ、ややあつて「人殺し！」の女の悲鳴。半七は後から来た徳次とともに、格子を蹴破って飛び込む。新次郎は取り押さえたが、小左衛門は取り逃がす。新次郎がお節の美貌にとりこにされているのにつけ込んで、お節は新次郎に接近し、店の金を盗んで欲しいと色仕掛けでそそのかしたのだ。父親の小左衛門が旗本屋敷で用人を勤めているあいだに、千両ほどの金を使い込んだ、その埋め合わせのためである。二度にわたる店の盗難は、新次郎の仕業であった。

あけて天保十三年の三月、水野忠邦の改革のあおりをくって、百日の入牢をしていた娘義太夫三十六人が釈放されたが、その内の一人の竹本染之助が挨拶にきた。染之助の語る女牢の内情は、惨憺たるもので、牢名主は大阪屋花鳥という吉原の花魁おいらんであった女である。花鳥は吉原の自分の部屋に放火をして逐電した罪で、天保十年、八丈島へ島送りとなったが、天保十一年、島抜けをして江戸に潜んでいたところを、御用となっていたのである。牢名主の花鳥は、娘義

大夫の大半に夜伽よとぎをさせて、なぐさみものにしては、夜毎の快樂に溺れていたのだが、なぜか翌日になると、前夜の犠牲者に鰻飯をおごったという。娑婆で六百文のうなぎ飯でも、牢内に入れれば一両にはね上がる。島抜けをした女に、なんで贅沢ができたのか。磯野小左衛門と花鳥は、吉原で馴染みの関係にあった。花鳥は小左衛門と再会する。お節は生まれつき手癖が悪く、万引きなどを働いていた。小博奕を商売にしていた花鳥は、巾着切りの竹藏と知り合う。これで悪の四人組が腹を合わせ、お開帳の浅草で網を張っていた。筋書通りに鍋久に入り込んだお節は、新次郎に金を盗ませるのだが、久兵衛はたび重なる盗難に、お節を疑う。そこで花鳥が妙案を考え出す。花鳥が身代わりとなつて、後日の探索をくらまそうとする狂言を仕掛けたのである。

明治に復活する大阪屋花鳥

八丈島へ島送りになった流人の、二六五年間にわたる記録である『流罪人明細帳』（東京都公文書館蔵）には次のようにある。

花鳥（子、十五歳）。文政十一年十月流罪。新吉原江戸町二丁目、伊兵衛店、遊女屋しげ後見、宇兵衛抱え遊女。榊原主計頭吟味。附火の科。天保九年七月拔舟致候。後、江戸にて死罪。三根村割当。

「附火つけひの科か」であるから放火の罪で遠島となり、十年を上回る島暮

らしのあげく、「天保九年七月拔舟致候」ということで、博徒の佐原の喜三郎ら数人とともに島抜けをし、後に江戸で死罪となつてくる。この実話は、四十数年後の明治十年代に、初代柳亭りゅうてい燕枝えんしによつて『島衝しまとどろき沖白浪おししろなみ』と題して高座にかけられ、評判を呼ぶ。この柳亭燕枝について、綺堂が書き残しているので紹介する。

（明治期前半の）落語界に於いて三遊亭円朝に対峙したのは柳亭燕枝である。円朝一派を三遊派といい、燕枝一派を柳派と称し、明治の落語界は殆んどこの二派によつて占領されているような観があった。殊に燕枝は非常な好劇家で、常に団十郎の家に入りし、団十郎の俳名団洲に模して、みずから談洲楼と称していた。円朝は温順な人物であつたが、燕枝は江戸っ子肌あまがらの暴っぽい人物で、高座における話し口にもよくその性質をあらわしていた。好劇の結果、彼は落語家芝居をはじめ、各劇場で幾たびか公演して人気を取つたこともある。

燕枝も円朝と同様、文字の素養があつて俳句などを善くした。したがつて、自作の続き話も多かつたが、速記本などには余り多く現われていないようである。彼が得意とする人情話には、悪侍や無頼漢が活動する世界が多く、何となく円朝は上品、燕枝は下品であるかのように認められたのは、彼として一割方の損であつたかも知れない。（中略）

燕枝の人情話の中で、彼が最も得意とするのは『嶋千鳥沖津白

浪』であった。大坂屋花鳥に佐原の喜三郎を配したもので、吉原の放火や、伝馬町女牢や、嶋破りや、人殺しや、その人物も趣向も彼に適當したものである。これは明治二十二年六月、大坂屋花鳥(板東家橘)梅津長門(市川猿之助)佐原の喜三郎(中村駒之助)等の役割で、通し狂言として春木座に上演された。(綺堂・隨筆「寄席と芝居と」)

『島衝沖白浪』は、回数は少ないが現在でも高座にかけられている佳作である。『島衝沖白浪』というタイトルは、明治十四年、新富座で初演された河竹黙阿弥の名作『島衝月、白浪』にあやかっつて題されたものと思われる。したがって、燕枝の作は明治十四年以降に高座にかけられたのであろう。高座の速記を伊東専三(橋塘)が明治一六年〜一七年にかけて、二十回に分けて『新編都草紙』と名付け、毎月一回分ずつ活字組の草双紙として滑稽堂より出版する。タイトルは『佐原喜三郎 大坂屋花鳥 島衝沖白浪』であった。これはいわゆる「実録本」と称されるジャンルに入る文芸で、当時の庶民の支持を受けていた。活字印刷であるにもかかわらず、江戸時代の草双紙の体裁で発行されているところが興味深い。同書は明治十九年、蘭花堂より一冊本で翻刻される。挿画は尾形月耕である。大正六年、早稲田大学出版部より『近世実録全書』第十七巻に「佐原の喜三郎」とタイトルを変えられて復刻・収録されている。綺堂は円朝の高座を観ている(綺堂・前掲書)し、燕枝の高座も観ている。況んや歌

舞伎に翻案された『嶋千鳥沖白浪』の舞台も観ているに違いない。寄席と芝居の世界との関係について、綺堂は次のように書いている。

講談又は人情話の劇化されたものはたくさんある。ここでは最も有名な物のみを紹介したに過ぎない。劇場で講談又は人情話を上演するのは、あながちに題材に窮した為ではなく、寄席の高座で売り込んだものを利用するという一種の興行策である。講談師や落語家も自分の読み物上演されることを喜んだ。これも一種の宣伝になるからである。要するに、寄席と芝居と、たがいを持ちつ持たれつとの関係で、高座の話が舞台に移植されたのである。それも前に云う通り、円朝、燕枝らの死後は殆んど絶えた。(綺堂・前掲書)

円朝と燕枝はともに明治三十三年(一九〇〇)が没年であった。明治時代の東京において、市民の娯楽と言えは、歌舞伎芝居と寄席くらいしかなかった。江戸時代と大して変りがないのである。歌舞伎の小屋は十座を数え、寄席にいたつては明治二十二年のピーク時には、二百五十五席あったことが記録されている。市内のどこへ行つても、家の近くに寄席の一軒くらいはあったのである。映画やレコードといったメディアが普及するのは、明治の終りのころであり、ラジオの本放送は大正十四年(一九二五)である。明治五年(一八七二)生れの綺堂は、幼少の頃から歌舞伎や寄席芸に親しみ、そうした芸

の世界によって綺室は育てられ、それを通して江戸の風俗を確実に自家葉籠中のものにし、劇作や小説に反映させたのである。

フィクションとしての大阪屋花鳥

大阪屋花鳥は実在の人物としてよりも、燕枝の人情話の高座からはじまり、高座の速記による実録本としての出版、歌舞伎への翻案など、フィクションの上でのヒロインとして、世に知れ渡っていた。『高衝沖白浪』の内容は、社会の暗黒面を基調にした悪女ものであるが、『近世実録全書』の「佐原の喜三郎」の梗概の文体が、実録本の世界の独特な雰囲気を与えているので、一部紹介する。

此の一篇は文政の末年から江戸末期の糜爛せる頽廢時代を背景とした白浪譚である。下總佐原の俠客喜三郎とお虎（後の大阪屋花鳥）との情事を経とし、これに兇惡無道なる湯島根生院の所化女若と、敏捷なる巷賊三日月小僧庄吉と、而して博徒の親分小菅の勝五郎等を配して緯となし、出場人物には、博徒あり、俠客あり、破戒無慙の墮落僧あり、旗本の嬖客あり、中着切りあり、或はこれに對する女性には、遊女、毒婦、賊婦、淫婦等が點出され、又場面としても、喧嘩有り、殺傷有り、報讐あり、或は陰鬱悲惨なる牢内の状景あり、一轉して遠流に處せられたる囚人の島の生活あり、扱は牢破り、島抜け等の好奇的場面に満たされ、殆ど應接に遑なからしめ、讀者をして一

つの血腥き殘虐なる別世界に誘致せざんば止まざるの思あらしめるであろう。（『近世實録全書』第十七卷所載の河竹繁俊による「佐原の喜三郎」の解説）

おそらく大正時代に入っても巷間の讀者には、こうした内容の実録物を支持する人たちが、広く存在していたのであろう。強盜殺人を犯し吉原に逃げ込んできた、情人の旗本・梅津長門を、大阪屋花鳥は、自らの部屋に放火し混乱にまぎれて捕り手から逃がし逐電するが、捕らえられて三宅島（事実は八丈島）送りとなる。娘の頃、世話になった博徒の佐原の喜三郎と島で再会し、共に島抜けをして江戸に潜伏するも、再び捕らえられ、女牢の牢名主となる……。

綺室が、鉄物屋の主人久兵衛殺しの主犯に設定した「大阪屋花鳥」は、あくまで『高衝沖白浪』からの借用なのである。本作が昭和九年（一九三四）に発表された当時、「大阪屋花鳥」というキャラクターが、どの程度伝わっていたのか、知るすべはない。しかし、本作を掲載した『講談倶楽部』十一月号の目次を見ると、人気作家の「大衆小説」の表題が目白押しである。時代物あり、現代物あり、しかもタイトル名には、讀者の関心をそそらせるような文字が仕込まれている。「結婚」「喧嘩」「悲戀」「地獄」「妖麗」「劍豪」「女魔術師」などなど。「結婚」とか「悲戀」とか、いかにも新時代の到来を反映しているが、大方はあの「実録物」の世界と、それほどかけ離れてはいないようだ。さらには、落語の高座の速記が、三本も掲載されている。昭和に入っ

ても、明治・大正を引き継ぐ市民文化のエートスが、時代の底流にあったのであろう。「大評判大人氣の半七捕物帳」に綺堂は、実録物の世界を巧に取り込んだのである。

仕組まれた筋書き

第三章の終りに、半七や徳次は事件が仕組まれた犯罪であること、を喝破するのだが、綺堂は第一章の「居開帳」で賑わう浅草観音の境内の場で、早くもそれとなく文章の上で狂言の筋書きを暗示している。読者に気付かれないように。鍋久の一行に「あ、もし——」とお節が声を掛け、久兵衛のふところから巾着切りが紙入れを引き出そうとしているのに、注意を喚起する場面だ。お節は十七、八の娘と説明されているが、咄嗟の出来事に、素人の娘が機転をきかせて声を掛けることなどあり得ないし、礼を言われて「余計な口出しをするでもない」と存じましたが——と挨拶を返すことなど、小娘に出来ることではない。また、巾着切りが折角抜き取った紙入れを地面に叩きつけるのも不自然だ。紙入れをつかんで、一目散に逃げるのが普通である。お節が自分の住所も姓名も名乗らずに別れて行った、というのも、久兵衛や母親の関心を引きつけるためなので、住まいまで後をつけさせるのも計算ずくだ。そして別れ際にお節は久兵衛の顔を二度も見かえっているのである。人丸堂のそばで倒れているお節を小僧に発見させ、巾着切りに仕返しをされたと言わせ、「刃物でなく、拳固で突いただけであるから、いわば当て身を食わされ

た」という説明にも、違和感がある。さらに鍋久の一行に、お節の家まで送らせるように仕向け、「娘はしきりに辞退したが、ほかに思惑のあるおきぬ母子は無理に一緒に付いて行って、娘の親にも逢った」ところで、久兵衛母子は、完璧に狂言の筋書きに乗せられてしまうのである。同時に読者もストーリーの展開を真に受けてしまう。綺堂の仕掛けに気付くのは、悪党どもが実行した狂言と知ってから後のことだ。読者に気付かせずに狂言を仕込んでいく綺堂の文章の呼吸は、さすがに歌舞伎の脚本を多く手がけているだけに、見事なものである。

時代背景

本作は天保の改革（天保十二年～十四年）の時代に合わせるように事件が展開しているが、この改革の推進者である老中水野忠邦は、江戸市中の風俗取締りを徹底したことで知られる。綺堂は娘義太夫の連中三十六人が、風俗紊乱の科で入牢した一件を、事件解決の糸口に設定して、小説の急所とした。この一件は事実であり、『武江年表』天保十二年の条に次のように記載されている。

十一月二十七日夜、娘浄るり三十六人召し捕られ入牢、翌年三月落着す。

さらに、娘義太夫の芸名を詠み込んだ俗謡（トッチリトン）が作ら

れた。

寄場（止せば）よいのに敵しいお触れ、三度や語豊五度の事じやない、巴勇（早よう）やめればよう語寿（ようがす）に、巴女（恥）をさらして引出され、巴山ねん（残念）なことをした、雛久（ひさびさ）やめていたものを、わるいことには染之助、云々。

とあって、竹本染之助も実在の人物である。花鳥が、女牢内で再会した、かつて恋敵であった娘義太夫の一人に意趣返し狼藉を働くという、実録物の「大坂屋花鳥」の一場面を取り込んで、綺堂はこの事件の主犯が花鳥であるとする解決の糸口に設定した。いわば、歴史的事実とフィクションとの融合である。このように、記録に残されている事象を巧に織り込んでいくくだけは、先に触れた浅草観音境内の場面にも見られる。鍋久の一行がお節と別れた後のさりげない描写である。

奥山にはかの驢馬のほかに、菊川国丸の蹴鞠、淀川富五郎の貝細工などが評判であるので、それらも話の種に見物する予定であったが、云々。

これについては、『増訂武江年表』（嘉永三年刊）に次の記載がある。

天保十二年三月十八日より、浅草寺観世音開帳（奥山にて驢馬を見せ物とす。又菊川国丸といへる者、同所にて、曲鞠を蹴る。見物日毎に山をなせり。又淀川富五郎といへるもの、作りし貝細工の見せ物もあり）。

天保の改革が実施されるのは、天保十二年の五月である。したがって、実施前の浅草観世音開帳の三月には、江戸の春を謳歌する光景が、境内の歓楽地奥山に満ちあふれていたのであるが、十一月には改革の嵐が吹き荒れ、娘義太夫の三十六人が召し捕られる事態となる。しかし百日あまりの天保三年三月には、釈放されている。いわば、見せしめの懲戒を受けたということだ。綺堂はこのあたりのいきさつを、史実通りに描いている。大坂屋花鳥が仕置になったのは、同年五月とされているが、おそらくこれも史実であろう。

結語

本作は、大坂屋花鳥という実在の人物を事件の主犯に設定し、鍋久一家をめぐる殺人事件の解決にいたる物語を展開しつつ、『島衝沖白浪』におけるフィクションとしての大坂屋花鳥のキャラクターを借用して、小説に厚みと複雑さを与え、さらに天保の改革の時期にあわせて小説の時代背景とし、史実を巧に織り込んで小説にリアリティをもたらししている。江戸時代に始まる実録物のジャンルの系譜が、歌舞伎の白浪の世界にも連なっており、多くの人々の支持を

受けて、昭和九年にいたってもつづいていることを、綺堂は見逃してはいない。

「大森の鶏」小考

小山 恭平

参考文献

- 『近世実録全書 第十七卷』早稲田大学出版部、大正六年
綿谷 雪『近世悪女奇聞』中公文庫、平成二十二年
岡本綺堂『綺堂芝居ばなし』旺文社文庫、昭和五十四年
『講談倶楽部』昭和九年十一月号、講談社
今村 孜『半七捕物帳事典』平成二十二年、国書刊行会

「大森の鶏」は『講談倶楽部』（講談社）昭和一〇年一月号に発表され、昭和三年一月刊行の『半七捕物帳』（同光社）九巻に収録された作品である。題名の「鶏」の字に初出の際は「雞」が使われていたが、初刊掲載時に「鶏」に変更された。

梗概は以下の通りである。

自分の庄太と共に川崎大師に参詣した半七はその帰路、大森の料理屋で休憩をとる。庄太と二人そこで酒を飲んでみると、店先に一挺の駕籠が卸され、中から三十二三の女が現れる。その途端、店の庭で飼われている鶏のうち一羽が興奮し、女に襲いかかる。店の人間は驚き、鶏を捕まえようとするが、鶏は執念深く女を突き続ける。鶏の狂乱を目の当たりにした半七は女と鶏に因縁を感じ、女の調査を子分達に命じる。

半七達の調査によると女は名をお六といい、元は浅草の軍鶏屋「鳥亀」の女房であったが、夫が釣りの際に水死したため店を閉め、現在は桂庵を営んでいるという。半七はお六の夫の水死は、お六とその愛人勇二による殺人だと断定し、二人を捕らえるための準備を進める。

それから三日後、鈴ヶ森で男の死骸が発見される。半七はこの殺

人と鳥龜の一件には何か関係があると直感し、鳥龜と絡めて捜査を進める。結果、鈴ヶ森の殺人は勇二とその友人金造によるものだということが明らかにになり、半七の読みの正しさが証明される。

捕らえられたお六は、鶏による強襲は、鶏に憑依した主人の怨霊によるものだと述べるが、憑依の真偽については明らかにされないまま物語は幕を閉じる。

作品冒頭、半七宅を訪れた「わたし」は、川崎大師参詣から帰宅したばかりの半七に、岡っ引きの信心についての話を聞かされる。手柄話への導入部で提示されたこの「信心」という言葉は、「大森の鶏」を理解する上での手がかりとなる。本作品では人々の信心や、その拠り所となる寺社が重要なテーマとなっているからだ。本稿ではそれらの要素について考察を進めたい。

新田義興に纏わる伝説と安蔵

本作品に最も大きな関わりを持つのは作中に登場する新田神社である。名称だけの登場ではあるが、その祭神の新田義興の逸話は、本作品の被害者である安蔵の設定に影響を及ぼしている。

義興は生前、妻を含む多くの人間に裏切られ、最期は矢口の渡し場で謀殺されるが、これは安蔵も同様である。作者は義興の逸話からの影響を、以下引用する作中の二ヶ所で読者に暗示している。

「矢口か。矢口の渡し場なら六蔵でもありそうなものだが……」

と庄太は笑った。

「矢切で死んだ奴の詮議に矢口へ行く……矢の字尽くしも何かの因縁かも知れねえ。おまけにどつちも渡し場だ」

前者は義興の人生を描いた平賀源内作の浄瑠璃『神霊矢口渡』の登場人物名を振った冗談であり、これによって義興の逸話の影響が示される。そして後者の「矢の字」の因縁と渡し場、という条件にも義興の伝説は合致している。先述したように、義興はその最期を矢口の渡し場で迎えており、義興を祭る新田神社は破魔矢の元となった「矢守」で知られる。

安蔵と新田義興の死後の扱われ方は、生前彼らに起こった事態程はつきり似ているわけではないが、根本的な部分が共通している。

一三五八年に矢口の渡し場で義興が死亡してから、その付近では「光り物」が目撃されるようになり、義興の死に関わった者は皆悲惨な目に逢ったと言われている。義興の死後相次いで起こったこれらの事態を、付近の村人達は無念を抱いて死んだ義興の祟りであると断じ、義興を御霊として祭り上げる。義興の死とその死後に起こった災難は、当然無関係と見ることでもできるが、人々の内にある恐怖心が災難と無念の死を連結させてしまったのである。

これと同様、安蔵もまた、周囲の人間に怨霊にされてしまう。

作中でお六は、鶏には殺した主人の霊が憑いており、自分は復讐

されたのだと述べる。狂犬病のような病気や「料簡」(鶏にどの程度知能があるか)を疑った半七と比べて、お六の発想は随分と飛躍しているが、殺した主人に対して罪悪感を抱いているお六は、恐怖によつて、主人と鶏による攻撃を結びつけてしまったのである。事象だけを見れば鶏がある特定の人物を襲った、というだけの話であるが、お六の持つ情報がそこに怪異の可能性をもたらしたのだ。

半七は以下のように述べる。

鶏の料簡は誰にも判りませんから思い思いに判断するのほかにありません

鶏のような動物とは意思の疎通が成立しないため、人間にはその行動に込められた意味を知ることができない。意味を知ることができないからこそ、そこに怪異を入れ込む余地が生じるのである。この作品において鶏は、どのような解釈をも許容する受け皿として存在しているのだ。お六は自身が報いを受けるべき人間であると自覚していたからこそ、不可解な災難に怪異を見たのである。義興と違い、安蔵は祭り上げられる事はなかったが、お六の心理は義興を御霊にした者達と同様のものであると思われる。

作者は義興を模した安蔵を用いて、義興が怨霊として祭り上げられるまでの過程と、それに関わる者の心理を再現しようとしたのではないだろうか。

「昔の人」の世界観

先章で、お六が鶏の中に主人の怨霊を見たのは、お六が殺した主人に対して罪悪感を抱いているからだと述べたが、しかしいくら殺した相手に罪悪感を抱いているように、そもそも霊の存在を信じていなければ、そこに怨霊の姿など見ることはない。お六が主人の霊の存在を感じたのは、霊というものの存在を信じていたからである。

作品終盤、「わたし」に対して事件を語り終えた半七は以下のように述べる。

恐らく死んだ亭主の魂が乗憑ったのでしようと、お六は恐ろしそうに云っていました。お六ばかりでなく、昔の人はとかくにそんなことを云いますが、実際はどんなものでしょうか。

本作品は、不可解な事態の中に怨霊を見てしまう人間の心理を描いた作品であるのと同時に、ごく当然のように霊や神などといった超自然的存在を信じていた、信心深い「昔の人」の世界観を描いた作品でもある。

しかしそれを語る半七は純粹な「昔の人」とは言い難い。半七は冒頭、「わたし」に対して壮健は神仏のご利益であると語るが、鶏への憑依の真偽については「実際はどんなものでしょうか」と判断を保留し、曖昧化する。岡つ引きとして活躍した半七は江戸期の人間

であるが、「わたし」に対してそれを語る半七は明治に存在している。二つの時代に存在する半七は「昔の人」の感覚と現代の感覚を併せ持っているのだ。

鶏

どうとでも解釈できる不可解な災難を描くには、意思疎通の成立しない動物を用いるのが都合がいい、と先に述べたが、なぜその動物は特に鶏でなくてはならなかったのだろうか。

「鶏」が日本に伝来したのは縄文時代晚期以前であり（弥生時代とも）、日本書紀にも鶏はたびたび登場している。朝に鳴き声をあげる鶏は、夜の終わりを告げる鳥として古来より邪気を払う力があるとされており、京都では疫病流行の際などに鶏を用いた祓いの儀式が行われていた。

作中に登場する川崎大師は厄除けの寺として知られるが、これと鶏の「祓い」の性質は共通している。鶏という道具によって「祓い」という要素が強調されているのだ。お六が受けた鶏からの攻撃を、川崎大師からの「罰」と解釈するならば、その災いをお六に届ける存在として、鶏は最適な存在であったと言える。お六が川崎大師を参詣したのは、殺した主人の祟りを恐れての事だと思われるが、その帰路お六は自らが祓われたのである。

半七は冒頭、信心深い自分は神仏に罰を当てられた事がない、「わたし」に自慢するが、この半七の姿と、お六の末路は対照的である。

鶏を攻撃役にする事により、本作品は神仏による罰を描いた勧善懲悪的な作品として読む事も可能になるのである。

先述したように、鶏は祓いの儀式に用いられる神聖な動物であるが、「軍鶏」という種は鬪鶏や食材に用いられる俗な動物でもあり、作中ではそれらの要素も作品展開に影響を与えている。軍鶏が日本に伝来したのは江戸時代の初期で、輸入元のシヤムにちなんでこの名が付けられたと言われている。筋肉や蹴力の発達した軍鶏は攻撃力に優れ、軍鶏同士を争わせる鬪鶏は日本を含む各国で人気を博した。鶏による人の殺傷、というこの作品のアイディアは、鬪鶏から着想したものであると考えられる。

軍鶏は食用としても用いられていたが、作中で半七が「軍鶏屋へ来て鳥鍋や軍鶏鍋なんぞを食うのは、あまり上等の客ではない」と述べているように、上等な食物とは見なされていなかった。江戸の風俗を対談形式で解説する『幕末百話』には以下のような記述がある。

ココへ参ると猪、豚、猿、狐、鹿、何でも喫べられました。もんじやというもあつて、獣肉を販売しました。軍鶏屋というものはありませんで躰合につかうくらい。たまにコレも養生喰いにするからといって買えば二朱で（十二錢五厘）大皿に肉が一杯あるんです。女は喃んで見て「才才忌だ」とホキ出したもんです

（『幕末百話』一三三頁）

安価な食物だからこそ、勇二のような「折助」が常食でき、結果、鳥龜の女房であるお六と常連客の勇二は結びついてしまったのである。

鶏は祓いの儀式に用いられる神聖な動物でありながら下等な食材でもある、二面性を持った鳥であり、「大森の鶏」ではそれらの要素が全て活用されていると言える。「祓い」という要素を強調する存在として、お六を攻撃する存在として、またお六と「折助」の勇二を結びつける下等な食材として、鶏はこの物語に大きな影響を与えているのだ。

「大森の鶏」は身に降りかかった災難を祟りと解釈してしまう人間心理と、「昔の人」の信心を描いた作品であるが、そこに鶏という要素を入れ込む事によって「祓い」という要素が強調され、神仏によって罰を当てられる人間を描いた因果応報の話としても成立しているのだ。

参考文献

市古夏生 鈴木健一『新訂江戸名所図会2』筑摩書房、一九九六年一〇月
今井金吾『詳説江戸名所記』社会思想社、一九六九年一月

今井金吾『定本武江年表 下』筑摩書房、二〇〇四年二月

今内孜『半七捕物帳事典』国書刊行会、二〇一〇年一月

大久保洋子『江戸の食空間』講談社、二〇一二年二月

川田壽『江戸名所図会を読む』東京堂出版、一九九〇年九月

川田壽『続江戸名所図会を読む』東京堂出版、一九九五年三月

喜田川守貞『近世風俗志(守貞謄稿(一))』岩波書店、一九九六年五月

篠田鉞造『幕末百話』岩波書店、一九九六年四月

菅原浩『図説日本鳥名由来辞典』柏書房、一九九三年三月

中田祝夫 和田利政 北原保雄『小学館古語大辞典』小学館、一九九三年一月

中村幸彦 阪倉篤義 岡見正雄『角川古語大辞典五』角川書店、一九九九年三月

野沢伸平『新訂 神奈川県歴史散歩 上』山川出版社、一九八七年五月

細川博昭『江戸時代に描かれた鳥たち』ソフトバンククリエイティブ、二〇一二年二月

堀田正敦『江戸鳥類大図鑑』平凡社、二〇〇六年三月

山田清作『未刊随筆百種(二六)』米山堂、一九二八年七月